

丸西産業、カットフルーツを全国へ リンゴ自社栽培も 信越企業攻めの一手

2023/1/10 5:00 | 日本経済新聞 電子版



手軽に食べられるカットフルーツの人気が高まっている

スーパーの果物売り場でよく見かけるカットフルーツ。リンゴやメロンといった旬の果物を手軽に食べられるため人気が高い。丸西産業（長野県飯田市）は独自ルートで仕入れた果物を自社工場で加工して全国に供給する。農家の高齢化を受けてリンゴの自社栽培も始めており、果物王国である長野県の企業としてさらなる成長を目指す。

「2023年も自社栽培のリンゴ畠を増やす」。丸西産業の山下大輔社長は意欲を見せる。農家の高齢化などでリンゴ栽培が落ち込むなか、効率が良い栽培方法も活用してカットフルーツに加工するためのリンゴの安定調達につなげる。

丸西産業は1877年（明治10年）創業の和紙問屋が始まりだ。その後、肥料販売を始めて農家とのつながりができる。転機となったのがレタス栽培で有名な長野県川上村の若手農業者との出会いだ。有機農業に関する研究などに取り組むなかで、コンビニエンスストア向けのレタス販売を始めた。

その後も安定的に野菜を調達したいスーパー やコンビニからの要望に対応。長野県だけでなく茨城県や熊本県など季節ごとに産地を変えながら毎日収穫して定額・定量で販売するシス

テムも構築した。現在ではレタスを中心にキャベツなどの葉物野菜を取り扱う。レタスだけでも契約農家は100軒に達する。

農産物の安全確保にも力を入れる。20人以上の社員が食の安全などに関する認証「JGAP」の指導員資格を取得しており、「すべての契約農家がJGAPを取得できるように活動している」という。

一方、カットフルーツ事業も着実に成長する。皮むきやカットといった手間がいらないため、「便利さに気づいた消費者が急速に増え、最近は年30%のペースで売り上げが伸びている」（山下社長）。自社工場では熟練の従業員が果物を手作業でカットすることで、断面がきれいな品質の良い商品を作ることができるという。

現在、カットフルーツはパインやメロンなど輸入果物を使うことが多い。円安などもあって国産果物に切り替える動きもあるが、贈答用などではなくカットフルーツ用としてコストなどが見合った果物を栽培する農家は不足しているという。

丸西産業の23年6月期の売り上げは160億円程度と前期より1割ほどの増加を見込む。今後もリンゴの自社栽培に加えて、農家と連携してカットフルーツ用の果物栽培などを拡大。消費者に新たな価値を提供すると同時に地域や農業の活性化にもつなげたい考えだ。

(大林卓)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.